

一橋大学審査学位論文

博士論文

男女別学校をめぐる経験とホモソーシャルティ

—北関東公立男女別学高校同窓会役員のライフヒストリーから—

徳安 慧一

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

SD141016

## 目次

### 序章 問題関心と本論の構成

1. 問題意識とテーマ
2. 研究の視点・指針
  - 2.1 進歩史観的な共学/別学図式への批判的視座
  - 2.2 「構築」と「形成」のアリーナとしての経験：社会化論の文脈
3. 調査対象の概要と特徴、方法
  - 3.1 マスメディア・学校関連出版物・ホームページの資料分析
  - 3.2 同窓会役員および関係者のインタビュー分析
4. 本論の構成

### 第1章 ホモソーシャル論再考：別学経験の考察に向けて

1. 本章の目的
2. 男女共学・別学研究の系譜
  - 2.1 教育（制度）史研究
  - 2.2 「ジェンダーと教育」研究
  - 2.3 男女別学におけるジェンダーの差異の政治を問うために
3. 男女別学とホモソーシャルリティ
4. ホモソーシャルリティにおける共属性/異質性を問うために
  - 4.1 ホモソーシャルリティとヘゲモニックな男性性
  - 4.2 女同士の絆におけるホモソーシャルリティ
  - 4.3 ホモソーシャルリティ論の拡張：ジラールを手がかりに
5. 結論

### 第2章 男女別学・共学化をめぐる言説分析

1. 本章の目的
  - 1.1 問題の所在
  - 1.2 分析視座
  - 1.3 調査概要
2. 別学・共学化の歴史的背景
3. 学歴社会と私立校における共学化
  - 3.1 学歴社会論の概況：別学校存続を理解する補助線
  - 3.2 東京における共学化
4. 東北・北関東地域の公立別学校共学化をめぐる
  - 4.1 東北地方の公立別学校共学化をめぐる動向
    - 4.1.1 福島県における共学化

- 4.1.2 宮城県における共学化
- 4.2 北関東地域の公立別学高校共学化をめぐる動向
  - 4.2.1 群馬県
  - 4.2.2 栃木県
  - 4.2.3 埼玉県
- 5. 共学化の論点はどこにあるのか
  - 5.1 学校をめぐる市場競争
  - 5.2 「特色ある高校づくり」をめぐる戦略
  - 5.3 学校選択の多様性
  - 5.4 実質的男女平等の志向
  - 5.5 共学の自然視と別学関係者の感情
- 6. 結論

### 第3章 同窓会に関わること：男女別学校の同窓会組織と活動

- 1. 本章の目的
  - 1.1 問題意識
  - 1.2 背景と先行研究
  - 1.3 分析対象
- 2. 共学化反対の動向と理由
- 3. 同窓会の組織体制について：運営方針・活動内容・資金力・役員の参与
  - 3.1 運営方針・活動内容
    - 3.1.1 X 高校
    - 3.1.2 Z 女子高校
  - 3.2 資金力
    - 3.2.1 X 高校
    - 3.2.2 Z 女子高校
  - 3.3 役員の参与
    - 3.3.1 X 高校
    - 3.3.2 Z 女子高校
- 4. 同窓会をめぐる考察

### 第4章 女子校経験の再評価と女同士の絆

- 1. 本章の目的
- 2. 先行研究と分析視角
- 3. 調査概要
- 4. 女子校経験への評価

- 4.1 地縁と生育歴
  - 4.1.1 「地元のお嬢さん」
  - 4.1.2 出身地の多様化
- 4.2 学歴
  - 4.2.1 高卒中心の「良妻賢母」時代
    - 4.2.1.1 入学
    - 4.2.1.2 良妻賢母主義的な教育方針
    - 4.2.1.3 高校生活への評価
  - 4.2.2 進学中心の「自立」志向
    - 4.2.2.1 入学
    - 4.2.2.2 進学中心の進路
    - 4.2.2.3 高校生活への評価
- 4.3 小括
- 5. 卒業後のライフコースと女子校経験
  - 5.1 就業経験と女子校経験
    - 5.1.1 社会性と性格：ZNo.4
    - 5.1.2 自分の目で社会を見る：ZNo.8
    - 5.1.3 均等法と育児：ZNo.14
  - 5.2 保護者・教職員の視点からの女子校経験
    - 5.2.1 娘たちの進学先、自身の勤め先としての出身校
    - 5.2.2 「女性のPTA会長」と同窓会
- 6. 女子校経験による紐帯
  - 6.1 共学化反対
  - 6.2 女子校経験の再評価とストーリーの同型性
- 7. 結論

## 第5章 男子校経験の再評価と男同士の絆

- 1. 本章の目的
  - 1.1 問題の所在
  - 1.2 先行研究と分析視角
- 2. 調査概要
- 3. ライフコースにおける男子校経験
  - 3.1 学歴
    - 3.1.1 入学
    - 3.1.2 高校生活
    - 3.1.3 大学受験と進路について

## 3.2 卒業後のライフコースと男子校経験

### 3.2.1 大学時代と就職後

3.2.1.1 「出世してない人間として別に活路を求めた道」：XNo.2

3.2.1.2 「劣等感の裏返し」と「居心地の良い団体」：XNo.3

3.2.1.3 葛藤と同窓会勤務：XNo.6

### 3.2.2 結婚・家事・育児

## 3.3 小括

## 4. 共学化反対と男子校経験

### 4.1 共学化反対の経緯と反対理由

### 4.2 男子校における伝統

### 4.3 共学化反対とジェンダー観

#### 4.3.1 冗談

#### 4.3.2 生物学的差異

#### 4.3.3 男女共同参画社会

## 4.4 小括

## 5. 男子校経験と男同士の絆

## 6. 結論

## 第6章 ホモソーシャルな絆の共犯関係

### 1. 本章の目的

### 2. 男女別学校内のホモソーシャルな関係の概念図式

#### 2.1 Z 女子高校

#### 2.2 X 高校

### 3. 男女別学校間のホモソーシャルな関係

### 4. 重層化されたホモソーシャルな関係

### 5. 結論：共学化反対をめぐる男女別学校の共犯関係

## 終章 男女別学のホモソーシャルリティとジェンダー平等

### 1. 本章の構成

### 2. 序章の問いに答えて

### 3. 考察

### 4. 今後の課題と展望

## 参考文献一覧

おわりに



本論の問いは、なぜ共学制が一般化した現代において、男女別学制が存続し、共学化に抗っているのか、という関心に端を発している。この関心から、「男女別学校にまつわる経験（＝別学経験）が個人の人生において、どのような意味や価値を持つのか」、という男女別学に対する価値観に対する問題意識に至った。そして、男女別学出身者の別学経験への意味づけ・価値づけの分析を通じ、彼らが持つ同性同士の絆、すなわちホモソーシャルリティを析出することとなった。本論の目的は、個々の人生をめぐる問題とジェンダー平等な社会をめぐる問題をホモソーシャルリティという同じ地平において捉えることであり、その具体的な一例として、公立別学高同窓会役員たちの共学化反対と彼らのホモソーシャルな絆を対象とすることとした。

本論の分析・考察の具体的な問いは以下の点であった。すなわち、学校教育制度である男女別学校での経験（＝別学経験）を対象とすることで、男女別学校におけるホモソーシャルな関係を考察する枠組みの提示（第1章）、日本の学校教育制度における男女別学の位置取りと共学化をめぐる言説はどのような論点があるのか（第2章）、別学校における同窓会組織のあり方と共学化反対はどのような関係にあるのか（第3章）、別学校出身者のライフヒストリーにおける別学経験への意味づけ・価値づけとホモソーシャルな紐帯はどのような関係にあるのか（第4章・第5章）、そして男女別学校のホモソーシャルな絆同士がどのような関係の中で結びついているか（第6章）である。

第1章「ホモソーシャル論再考：別学経験の考察に向けて」ではまず、男女共学・別学研究の系譜を批判的に概観した。男女共学・別学研究が、ジェンダー平等の達成をめぐる制度的・形式的な二項対立から教育そのものの質・内容へと議論の焦点がシフトする中で、教育観と実践面の双方から問い直されてきた。しかし、ライフコース的な視座が退潮した結果、特に男女別学・共学については、学校教育の範疇のみに議論が限定されていた。以上をふまえて、個々人の人生の中におけるジェンダーと教育の問題を取り扱い、男女別学という対象は学校教育段階としての男女別学だけでなく、より長い人生のスパンの射程で、ジェンダーを分かち、その区分に基づいてジェンダーの差異の政治がいかに関動するかを問う本研究の立場を述べた。次に、性別二元論的にジェンダー化された学校教育制度である男女別学を研究する上で、同性同士の絆を主題として取り上げる視座として、ホモソーシャルリティ論を検討した。これまでのホモソーシャルリティ論に基づく分析的研究は、性別二元論に基づく同性集団を別々に取り上げてきたため、男子校と女子校それぞれの経験の比較分析や男女それぞれのホモソーシャルリティの共犯関係の考察をおこなうためには、両者に通底する理論的視座を練り上げる必要を述べた。以上をふまえ、ホモソーシャルリティ論の理論的展開をレビューした上で、男女双方のホモソーシャルな関係に通底する理論的視座を示し、男女それぞれのホモソーシャルリティが持つ共犯関係を捉えうる可能性を提起した。ホモソーシャルリティを軸にした分析・考察が、その関係をふまえて主体やモデルがはらむジェンダーの問題

に迫る必要があり、特にルネ・ジラルルの理論的視座が、ホモソーシャルな関係がどのようなメカニズムで駆動しているかを解釈し、こうした社会関係がジェンダー化された主体にどのような影響をもたらすかを考察する一助となることを主張した。

第2章「共学化をめぐる言説分析：日本社会における男女別学・共学化の概観」では、多賀太(2016)によるジェンダーの正義をめぐるポリティクスの類型化を参照しながら、共学化の経緯とその論点について検討した。性別によらない学校選択の機会の平等や男女共同参画社会の推進といった理由づけは、一見ジェンダー平等主義を有している。しかし、行政は少子化による生徒減少を受けた高校再編という、ジェンダー平等とは異なる行動原理が混在した形で共学化を推進している。このため、共学化推進派と反対派のジェンダーをめぐる論点の対立は解決されていないと考えられる。このため、学校制度上の変化という結果を得ることはできる代わりに、ジェンダー平等をめぐる状況を変えることには必ずしもつながらず、二者択一的な共学化の賛否が争われる構図の中、学校をめぐる教育行政の課題に論点の比重が偏っているがゆえに、ジェンダーの問題が争点にならなかつたり、「特色」の一環として教育行政の課題に回収されてしまつたりしている。また、共学化について問題なのは、「ジェンダー保守主義」的な主張に対して税金の再配分や高校再編に訴えることが、結果的に「ジェンダー自由主義」的に性別特性論やこれに支えられた異質平等主義を補強する可能性が高いことである。もし実質的なジェンダー平等を追求していくならば、学校をめぐる教育行政からのみ共学化を検討するのではなく、ジェンダーをめぐる論点に立ち戻る必要があることを示した。

第3章「同窓会に関わること：同窓会組織と活動からみる男子校・女子校」では、公立別学高校の同窓会についてその組織体制や諸活動、運営を担う役員の参与方法を概観したのち、共学化反対の理由がどこにあるのか、そして、その理由が同窓会のあり方とどのように関わっているのかを分析した。共学化に対しては、組織としての声明こそ出していないものの、いずれの同窓会も強い反対を示しており、集めた署名数から見ても県内の別学校の中で主導的な役割をはたしていた。反対に向けた動向にこそ差はあったものの、男女別学校同窓会としての紐帯が、同じ学校の卒業生内だけでなく各学校の関係者間においても見出されることとなった。X高校とZ女子高校の同窓会は、運営体制（垂直的/水平的）や支部などの組織化の度合い（高/低）、資金力（高/低）、そして役員の参与ルート（推薦&支部経由/地縁・血縁・職縁・PTA）において大きな相違が見られた。特に組織化の度合いや資金面の差は活動の規模や内容に影響し、ボランティアな運営をおこなう女子校同窓会では、事務業務の負担などをめぐって役員間の立場の違いが浮き彫りとなった。かたや、男子校同窓会はボランティアな組織ながら、体系だった組織と豊富な資金力を有するものの、実務者の少なさや活動方針をめぐる役員間の立場の違いが見られた。こうした対比は①共学化へのスタンス、②世代間での学校経験・ライフコースの相違、③同窓会・同窓生が持つ意味という論点を提起した。

第4章「女子校経験の再評価と女同士の絆」および第5章「男子校経験の再評価と男同士

の絆」では、Z 女子高校および X 高校の同窓会役員のライフヒストリーから、出身校にまつわる自身の個人的な諸経験（＝別学経験）への意味づけ・価値づけが、彼らのホモソーシャルな紐帯にどう関わっているかを検討した。まず、第 4 章の世代間比較から見出されてきたのは、学校の教育方針の変化と地縁の薄らぎであり、一方では PTA 会長職の女性への開放や高等教育進学率の向上などに結びついているが、他方では同窓会内の温度差や郷土愛の薄らぎ、中等教育が通過点と化すなど、学縁を担保する基盤の揺らぎにもつながっていた。また、共学化については世代にかかわらず、「女性の自立」「女子校の良さ」「学校選択の自由」といった論点をめぐり、自身のライフヒストリーにおける女子校経験の遡及的解釈を通じた Z 女子高校への肯定的な再評価から反対していることが示された。一方で、同じく女子校経験の遡及的解釈から共学化に賛成する役員もあり、共学化反対が彼女たちを一枚岩にする主張とは言い難いことも明らかとなった。Z 女子校同窓会役員たちの語りに共通して見出されたのは、自身の高校時代への評価の如何にかかわらず、卒業後の職業経験や保護者としての経験などを通じて女子校経験が再評価されるストーリーの同型性である。そして、この同型的なストーリーには、自身の経験に基づいて自分たちをある種の女性や男性から区別する、女性内/男女間での差異化が結びついていた。

第 5 章では、高校時代の語りに高校生活における面白さや熱中の経験とそれを許容する X 高校、という型が共通して見出された。他方で、彼らにとって高校時代はあくまでも評価対象としての過去となっていた。また、X 高校出身者の主観的意味世界において、キャリアを通じた社会達成が規範化されている認識が逆照射された。X 高校同窓会役員たちの共学化反対の主張は、①別学における人材輩出、②別学の良さや校風、伝統、③生徒の学校選択の自由、という理由に基づいていた。しかし、彼らの男子校経験にまつわるライフヒストリーとの対応において、X 高校の校風や伝統、優秀とされる人材の輩出が彼らの主観的意味世界において価値づけられていた。ここから、問題の核心が彼らの価値の源泉となる X 高校の校風や伝統、人材輩出が損なわれる可能性にあることが見出された。彼らのいう X 高校の伝統は、学歴・学校歴や職業キャリアを通じた社会達成を通じた男性性ヒエラルキーの上位に至ることが求められる男性（性）的な規範に則っている。この規範は、別学という性別二元論的な学校制度と結びついており、共学化がその喪失をもたらすと考えられていた。別学が持つ性別二元論的な発想に対する彼らの捉え方については、ジェンダー・フリー・パッシングとも通ずるような性差別的なジェンダー観が見出された。男子校経験への意味づけ・価値づけと男性同士の紐帯との関係については、同窓生同士の閉鎖性と、同窓生同士の人脈を仕事など他の人脈と媒介する架橋性が、X 高校出身者たちは同窓生としてだけでなく、仕事の人脈などのネットワークへ重層的に埋め込んでいた。

第 6 章「ホモソーシャルな絆同士の関係：共学化反対における男女別学校の共犯関係について」では、第 4 章と第 5 章をふまえて析出したホモソーシャルな絆の関係図式が、キャリアを通じた社会達成をめぐる男性規範と人材輩出の蓄積による伝統（X 高校）や、女子校経験の再評価というストーリーの同型性（Z 女子高校）に依拠して取り結ばれていた。そし

て、それぞれ潜在的に脅威となりうる男女（X 高校）や、職業キャリアなどで対峙する男性や社会的なつながりを持たない女性（Z 女子高校）を関係から除外する三角形的図式を有していた。こうしたホモソーシャルな絆の三角形的な関係図式は、共学化反対をめぐるホモソーシャルな絆同士の関係において重層化し、共通の敵としての共学化推進派に対して利害を一致させていた。加えて、学校教育制度に含まれる性別二元論によって、男女別学・共学という議論そのものがセクシュアリティなどの問題を等閑視することで成立している点でも、ホモソーシャルな関係が重層化し、共犯関係を結んでいることを見出した。

そして終章では、以上の議論をふまえた上で、「ジェンダーにまつわる共属性は、諸個人の人生や彼らの人間関係の紐帯において、どのように意味づけ・価値づけられており、この様態がどのようにジェンダー平等の問題と関わっているのか」という本論全体の主題に回答した。ホモソーシャルな絆の三角形的関係図式は、キャリアを通じた社会達成をめぐる男性規範と人材輩出の蓄積による伝統や、女子校経験の再評価というストーリーの同型性に依拠して取り結ばれていた。また、共学化反対をめぐるホモソーシャルな絆同士の関係は、共通の敵としての共学化推進派に対して男子校と女子校の利害を一致させていた。加えて、学校教育制度に含まれる性別二元論によって、男女別学・共学という議論そのものがセクシュアリティなどの問題を等閑視することで成立している点でも、ホモソーシャルな関係は重層的な構造となっていた。重層化されたホモソーシャルな関係は、ジェンダーをめぐる政治における各々の立場にもかかわらず、男子校や女子校におけるホモソーシャルな絆や性別二元論的な学校教育制度の秩序維持のための、意図せざる共犯関係をもたらしていた。こうしたホモソーシャルな関係における共犯関係は、個人レベルだけでなく、組織集団レベル、そして制度レベルを通貫している。少子化と進学率の上昇を背景とした、県の教育財政に対する学校の適正規模化や受験市場における学校間の競争は、進学実績やキャリアといった卒業後の社会達成を評価の基軸とすることで、ホモソーシャルな関係を肯定している。また日本社会における男女間のジェンダー非対称性を背景とした、同窓会の組織運営体制は、かたや女性の自立を推し進めるため、かたや男性的な組織を守るため、男性と女性を互いに除外することで成立している。しかし、こうした除外は同時に、人材輩出を通じた資金力やそれに基づく組織力の差として、ジェンダー非対称性を体現する結果ともなっている。そして、本論ではこうしたホモソーシャルな関係における、意図せざる結果としての共犯関係から脱する可能性として、ジェンダーにまつわるカテゴリカルな攪乱とホモソーシャルな関係のあり方の問い直しの実践を提起した。

今後の課題として、1. ホモソーシャル論におけるセクシュアリティの問題を取り扱う上での、セクシュアル・マイノリティ当事者の別学経験の調査研究や学校教育制度上での扱いをめぐる制度研究、2. 公立男女別学高校や共学化について、時代や地域を広げた調査・分析、3. 卒業後の学校経験およびホモソーシャル論の理論的可能性についての理論的・実証的な検証、そして4. 本調査で対象とした各校同窓会の今後の組織運営や各役員の別学経験への意味づけ・価値づけ、そして共学化との関わりについての継続的な調査や、私立校

や実際に共学化がなされた旧別学校への更なる調査研究の必要性を指摘した。